

## 12 自傷により失明に至った重度自閉症者に対する支援について

国立秩父学園 村上功二 枡上耕祐 林克也

【はじめに】自閉症では、自傷などの問題行動が好発する。本対象者は自発的なコミュニケーションスキルに乏しく、様々な原因で不安と緊張が強まると自傷や他害の問題行動が日常化していた。自傷による白内障で視力を失い、手術を要した。術後、視力は回復したものの、自傷が続いていつ失明してもおかしくない状態にあった。こうした問題行動に対して、2年間にわたるアプローチによって自傷・他害行動が減少し、落ち着いた生活が出来るようになったので報告する。

【対象者プロフィール】M.S 37才 男性 診断名：自閉症、知的障害、てんかん、両眼白内障、左眼網膜剥離及び水晶体脱臼 行動特徴：強度行動障害（判定基準表：46点）、自傷（顔叩き、腕噛み）、他害（頭突き、叩く）、多動 コミュニケーション：PEP-R 言語理解 2:1、言語表出 2:0 定時服薬：てんかん薬、向精神薬、睡眠薬 発達検査：CARS：54.5点（重度自閉症）、SM-4歳1ヶ月

### 【取り組みの方法と結果】

1 ベースライン期の評価 平成11年4月～平成14年10月

(1) 方法 ①直接観察 ②記録の掘り起こし ③ABC分析

(2) 結果 ①ABC分析の結果、注意喚起、要求、情報請求が多かった②余暇時間に自傷が多く見られた③対象者は毎週末帰宅しているが、学園に帰園した夜に自傷が多く見られた

2 仮説 ①コミュニケーション行動としての自傷 ②余暇の過ごし方が分からないことによる自傷③家庭と寮生活の違いによる混乱

3 アプローチ 平成14年11月～平成16年1月

アプローチの目標を顔叩きの減少に置いた。本人との基本的信頼関係を再構築するために (a) 特定の職員をキーパーソンとする (b) 共感的、肯定的な対応を行い精神緊張を避ける、という2点を前提条件とし、具体的には①ディスケジュールの導入によって、1日の見通しを示す②適切なコミュニケーションの機会を設けた③週間スケジュールにより帰宅日を呈示④落ち着ける空間や好きな活動を複数用意し、余暇の過ごし方を本人の選択とした⑤家庭にもスケジュールを提供し生活のギャップの調整を試みた

4 結果 ①自傷が視力低下期、術後期に比べ減少した ②スケジュールに沿って生活できるようになり、受容性のコミュニケーションが増えた。言語での適切な表現性コミュニケーションも増えている ③表情が和らぎ、リラックスして過ごせるようになった ④家庭に提供したスケジュールは機能せず、帰園した夜の自傷は未だに見られる

【考察】：視力低下期にはおびただしい数の自傷がみられたが、失明に至り自傷が激減した。手術により、視力が回復したことにより再び自傷も増加したため、再失明が懸念された。そのために本人との基本的信頼関係を再構築して、彼の不安・緊張を減弱させ、自傷をなくすことを急務

とした。共感的、肯定的な援助を基本とすることで、彼の不安・緊張が減弱した。余暇時間はリラックスして過ごせるようになり、行動にもゆとりが出てきた。その上で、スケジュール、物理的な構造化等、生活環境を整えた結果、見通しを持って待つことができ、落ち着いた生活になった。コミュニケーションに関しては、自傷でなく、適切な言語要求表現が取れるようになり、それが、本人の安心感や安定に繋がった。家庭では提供されたスケジュールを機能させることができず、家庭での生活リズムを引きずったまま帰寮し、その違いによる混乱で自傷が残存している。まだ認知的混乱や要求の自己制御などの問題があるが、今後も問題を探りながら環境調整し、適切な援助を心がけていきたい。

**【まとめ】**：自傷から失明に至った自閉症成人に対し、不安・緊張の緩和と構造化、コミュニケーション等へアプローチを2年にわたって行った。その結果、自傷行為が著しく低下した。

### 自傷(顔叩き)日数の月別推移

